

博論をふりかえって

高 娜

博士課程在学中、この「博論をふりかえって」というコラムの忠実な読者でした。先輩たちの苦労話、経験談を味わい、自分もはやく博論完成のゴールに達したかったのです。ようやく2012年3月、「公害の社会的制御の展開過程：四日市市を事例として」で博士（社会学）の学位を取得しました。所属の田中研究室では、学部生から院生まで、学位論文審査後、自分の研究をふりかえる報告をすることが卒業前の宿題となっています。この卒業前の最終宿題を通して、過去の自分を丁寧に見つめ、知るができました。そして、過去の自分から将来への参考が得られました。この度、会報で文章の形で博論をふりかえるチャンスをいただきました。この場をお借りして、あらためて、名大修行で心得た最も大切なこと——自分の研究への「自覚力」についてメモしておきたいと思います。

在学中、指導教員に「どこまでできたのかだけではなく、何ができていないのかもちゃんと分かる」と言われていました。この難しくないお話は、実際なかなか達しにくいものです。他人の研究について、そういうふうに読めるにしても、自分の研究となると、必ずしも見抜けるとはかぎりません。

博論完成まで、データ収集と分析の困難にぶつかったり、論理展開の無理を感じたりして行き詰まることがあります。あるいは、段階的な研究成果を発表すると、伝わらなかつたり厳しい批判に晒されたりします。私はこれらの状況にかなり遭いました。最初の頃、ただすなおに落ち込むだけでした。一体どこがよくないのか、それはなぜなのかについて、深く考える努力をしなかったです。ないし、たまにそれまで自分のやってきたことを完全に捨てました。その結果、必要な調整をせず、ないものねだりを続けたため、一時の行き詰まりは長時間の行き詰まりとなってしまいました。その後、投稿論文と学会発表の研究指導を受ける時、この論文あるいは発表は、どこまで論じられたのか、次の課題は何なのかについて考えるようにと指示されました。先生のたたきをきっかけに、次第に、距離を置いて自分の研究を読み、診断することに気を使うようになりました。決して上手にできるわけではありませんが、この「自覚」を試みているうちに、小さな作業でも、それでどこまでできたのか、まだ何ができていないのかについて考えることは、次のステップの発見と設計につながるのだと分かりました。つまり、いまの問題点と課題を自覚する力があってからこそ、その問題点の克服と次の課題の展開があります。

博論は大きな作品とはいえ、限界のあるものです。限られた時間のうち、限られた方法を用い、限られたデータに基づいて限られた課題を論じます。博論作成の過程は、自分の構想や自分の書いた文章を何度も何度も読み直し、そのなかのさまざまな問題点と課題に不断に気づき、対応していくものだと思います。先生方の論文指導、先輩・後輩からの質問やアドバイス、コメントも実際、私たちが自分の研究をよりよく知るための助けなのです。そうした自分での自覚と、他人の助けを介しての自覚の下で、作業が着実に積み重ねられ、研究内容の深みが増していきます。さらに、博論全体に対して、どこまでできたのか、何ができていないかを自覚することは、等身大の自己評価を行い、そしてポスト博論の研究を開く準備をすることになるでしょう。

もっと早く先生のおっしゃることを理解し、自分の研究への「自覚力」を身につければ

よかったのに…と時々悔やみます。一方、博論完成の過程は、まさに先生方や学友たちの助けの下で、この「自覚力」を鍛えるプロセスそのものだとも思います。こうして、自分が過去の失敗をもってようやく理解した「自覚力」を、この場をお借りして、今後のための覚書として書き留めたかったです。

博論を振り返って思ったことは、実に言い切れないほどあります。先輩たちの「博論を振り返って」でもたびたび述べられたように、社会学講座の指導体制、社研全体で作られた場は、個々人の成長に大きく資しました。先生方をはじめ、社研の皆さんに対して、言葉も見つからないほど感謝しております。特に、留学生の私は、日本のこと、しかも日本の「時代外れ」の公害問題を研究課題としてやり抜いたのは、格別に丁寧なご指導と力強いお支えをいただいたからです。真っ赤に修正され、または付箋がいっぱい貼られた原稿、紙の裏まで書き綴られたコメントなどは忘れられないものです。また、姉妹のように一緒に歩んでくれた同門の仲間たち、占いの特技を用いるまでいつも励ましてくださった先輩をはじめ、良き学友に恵まれ、「一人ではない」心強さに常に支えられていました。

在学中、指導教員に研究の具体的内容にとどまらず、「悩みを楽しむ」方法や「上手な悩み方」についての指導も受けてきました。「博論を楽しく書こうね」という話は、指導教員によって、冗談半分に、わが研究室のモットーに指定されました。博論完成まで、指導を受ける側だけではなく、指導する側もいろいろと悩むに違いありません。知らないうちに先生方に与えてしまった指導の悩みが知りたいです。また、「自覚力」が大切ですが、先生方から見た私たちの博士完成過程も伺いたいものです。いつか「博論指導をふりかえって」というコラムもあればと願いつつ、結びの言葉として、「正しい悩み方をしようね」と自分にも後輩たちにも言いたいです。

「ほんとうに切実な問題」に取り組むということ

翁川 景子

博士論文を通して、私は、私にとっての「ほんとうに切実な問題」に、間接的にはありますが、取り組むことができたように思っています。何をどう書いたらよいかさっぱり分からなくなってしまい苦しい時期もありましたが、そんな最中にも「ほんとうに切実な問題」を手放さないこと（ある社会学者はこのことを繰り返し述べています）が、重要であったと思っています。10代の頃に、自分が生きる世の中について深い疑問を感じ、様々な要因が重なって社会学を専攻し、それから十数年の時を経て、やっと、「ほんとうに切実な問題」のほんの一部を明らかにするとともに、今後のアプローチ方法が分かりました。これは、博士論文を執筆するという大作業を経なければ、至ることができなかった境地だと思っています。

私は、研究テーマを「絞る」というよりも「広げ」て、関心のおもむくままあちこちを手をつけてしまうタイプでしたので、博士論文を書く際にも広がりすぎてしまったテーマたちに筋を通すことが最もたいへんな作業でした。筋を通すには、自分の研究テーマの位置づけを相対化することが必要でしたので、テーマの背景となる知識を得るためにかなり勉